

2021年8月29日 主日礼拝

説教題「真夏に響く平和の賛美」マタイ福音書 21 章12～17節

主任牧師 加藤 誠

『わたしの家は、祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたたちはそれを強盗の巣にしている」(マタイによる福音書 21 章 13 節)。

今朝、一緒に読んだ場面は主イエスがエルサレム神殿に礼拝に出かけられた時に起こった出来事です。ここに主イエスを喜んでいる人たちと腹を立てている人たちがいます。喜んでいるのは目の見えない人や足の不自由な人たち、そして子どもたち。腹を立てているのは祭司長や律法学者などユダヤ教の指導者たち。当時のエルサレム神殿は、人びとの属性によって入れる場所が決められていました。異邦人は一番外側の「異邦人の庭」まで。女性と子どもたちはその奥の「婦人の庭」まで。そして一般男性はその奥にある「イスラエルの庭」まで、さらにその奥の「祭司の庭」は祭司だけが入ることのできる聖なる空間とされていました。つまり神さまの前に異邦人、女性と子ども、男性、祭司という「序列」がつくられていたのです。また目の見えない人や足の不自由な人たちは犠牲をささげて礼拝してはならないと決められていました（レビ記 21 章参照）。

そのエルサレム神殿にやってきた主イエスは、神殿の境内（異邦人の庭）で両替人の台や鳩を売る者の台をひっくり返し、「あなたたちは祈りの家を強盗の巣にしまった」と激しく批判し、目の見えない人や足の不自由な人を癒されたのでした。神殿での礼拝から締め出されていた「障がい者」たちに、「あなたたちも神さまによって礼拝に招かれている大切な一人であり、神殿の奥まで入って礼拝して良いのだ！」という意味での癒しをされたのであり、同時にそのように「障がい者」を礼拝から締め出している指導者たちに対して、「神さまに祈りたいと思う人が誰でも来られるのが神殿であるはずなのに、いろいろな決まり事で人々を縛り、序列をつくり、さらには人々の礼拝したいという気持ちを利用して利益をむさぼっている！」と厳しい批判を込められて行動されたわけです。そして、その主イエスに向かって子どもたちが「ダビデの子にホサナ」と叫んだのでした。「ダビデの子」はイスラエルの人にとっては「人びとを救うメシア」を意味しましたから、祭司長や律法学者たちには我慢のならない言葉でありました。神聖なる礼拝の秩序をぐちゃぐちゃにして、メシア気取りで我が物顔に振舞うガリラヤから出てきた田舎者、イエスに腹を立てたわけです。

しかし主イエスがここで明確に言い抜かれ、断固として行動されたことが指し示していることを大切に受けていきたいのです。神さまの前にはどんな人も、どのような境遇の人も、大切な礼拝者として招かれているということ。性別、年齢、国籍、肌の色、社会的な地位、どれだけ多額な捧げものをしているかどうかは関係ない。神さまに祈りたい、賛美したいと思う者は、誰もが神殿の一番奥まで進み出て、神さまを礼拝できる。それが神さまに喜ばれる神殿なのだということ。

この場面を読みながら、二つの話を思い出しました。一つは昔、沖縄からアメリ

カに留学に出かけたある牧師の話。神学校で友人に誘われて主日礼拝に出かけた時のこと。礼拝堂の一番前の席に座ろうとしたら「ここはお前が座れる席ではない。献金をしている人たちの席だ。お前の席は二階だ」と指さされたのだとか。その教会に二度と行くことはなく「バプテストの教会に行った」（当時、バプテストは庶民の貧しい人たちが行く教会だったようです）という話。もう一つは東工大の上田紀行先生の話で、ある女子学生が生きることに行き詰まり、死を考えて「海なら死ぬかな」と真夜中の町をさまよっていたら、ふと目の前に教会があった。礼拝堂のドアを押してみたら中に入れたので、しばらく席に座っていると、光が射しこんできたあたたか光に包まれたように思えて「あなたは生きなさい。生きていいのだ」という声が聞こえてきて涙があふれ、もう一度頑張ってみようという思いになったという話。たぶんカトリック教会だったのだろうとは思いましたが、暗闇の中で神さまを探し求めている人がいつでも入れて祈ることのできる空間。それが礼拝堂の大切な意味なのだということを教えられます。

今朝の週報巻頭言に「きよしこの夜」を作詞したヨゼフ・モールのことを書かせていただきました。先日の首相官邸前ゴスペルに参加した時に、平良愛香牧師から「きよしこの夜」の試訳を教えてもらって、この賛美歌が平和を祈り願う賛美であることを知りとても感動しました（ぜひメロディをつけて歌ってみてください）。そしてクリスマスの賛美歌は12月にだけ歌うのではなく、みんなが忘れていた真夏のような季節にこそ、今日も争いと悲しみがあふれる私たちの世界にイエス・キリストが生まれてくださったことを賛美することの意味を考えさせられたのです。そして家に帰り、川端純四郎先生の「さんびかものがたりⅡ」を菊地先生から借りて「きよしこの夜」誕生のいきさつを知り、さらに心を深く動かされました。時はナポレオン戦争が20年も続いて、人びとが飢えと困窮に苦しみ、大切な家族を戦争で失い、涙に覆われていた時代。作詞したヨゼフ・モールの母親は貧しい裁縫婦であり、父親は銃撃手。つまり傭兵として戦場を渡り歩いた男であり、モールが生まれた時には戦場に行き行方不明になっていたそうです。そこで首切人ヨゼフという男が名義上の洗礼親（ゴッド・ファーザー）になり名をつけてくれたのですが、首切人は非差別民のために教会に出入りが禁じられていたために洗礼式（嬰兒洗礼）には代理の人が出席したとか。そのように貧しさのギリギリの境遇で生まれ育ってきたモールが教会の聖歌隊に入り、やがて神学校に進んで司祭となり、ナポレオン戦争が終わった年のはじめてのクリスマスに「きよしこの夜」を作詞したのでした。なんとという神さまの出来事でしょうか。今朝の箇所でも主イエスが「幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美の歌を歌わせた」という詩編8編の言葉を引用していますが、まさにその通り、当時の社会のギリギリの境遇に生まれた赤ん坊を通して、神さまはわたしたちに平和の君として生まれた主イエスを賛美する賛美歌を与えてくださったのです。クリスマスの時だけでなく、クリスマスとは正反対に思える真夏にこそ、この賛美歌に込められた平和の祈りを一緒にささげて、神さまを賛美していきたいのです。